

浜離宮ランチタイムコンサート vol.221

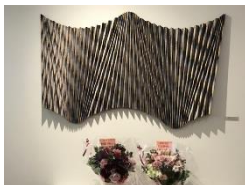
御喜美江&大田智美 アコーディオンデュオリサイタル

2022年12月22日(木) 浜離宮朝日ホール 13:00 開演

当日はあいにくの雨天(小降り)で午前中は冷たく寒かったけれど、終了後会場から出た時には雨も上がり時折薄日が射していました。

朝日ホールへ行くのは初めてです。「浜離宮朝日ホール」で検索してみると、1992年にオープン。客席数552席。シューボックス型(靴箱のような立方体)の室内楽専用ホール。とありました。また、残響・聴衆とステージの関係の親密度・音のバランス・音色の輝き・透明感・温かさ・質感などを考えて作られていることで、弱音による繊細な演奏を全ての座席で満喫出来るホールとして、演奏家や聴衆の皆様から愛されています。と書かれています。

横に21席、縦に22列(途中に通路)、2階は左右に1列(24席)ずつ設けてあり、後方に3列つくられています。縦に長いせいか天井も高く感じます。客席はほぼ満席状態だったのではないだろうか。筆者のたよりない知識で書くのはどうかとの思いを感じながらパソコンに向かっています。以下に演奏からイメージしたことを記してみました。



指揮者 佐渡裕氏より送られた花束(ロビーにて)

左は御喜美江さんへ

右は大田智美さんへ

(写真提供: 本荘雪子さん)



開演時刻になると拍手で迎えられ、大田智美さんは和服を思わせる装い(下はゆったりとしたワイドパンツ)でボタンアコを抱えて、御喜美江さんは上下黒のドレスで鍵盤式アコを抱えて登場します。客席から見て舞台左側に御喜美江さん右側に大田智美さん。このお互いの位置は最後まで変わりませんでした。

拍手が止みしずまったところで、お互いに目を合わせ息を吸い、ゆったりとしたメロディーが流れ客席は次第に夢の中へと誘われてい

きます。曲は「裸の島」プログラムの解説によると、【1960年に公開された新藤兼人監督の実験的モノクロ映画〈裸の島〉のために林光が作曲したテーマ音楽。で、ご自身が林光さんの後押しによって世に認められたことから、以前のインタビューに「コンサートはこの美しい旋律によってどうしても始めたいのです」と答えている。(解説より一部転記)】

夢の中に誘われたところで、次の曲「幻想曲とフーガ ト短調 BWV542」J.S. バッハ(御喜美江 編曲)“何か始まるぞ”、聴く方も音に集中します。森の中をさまよい始める、次第に風が出てきて(じゃばらを大きく使って)視界が開けると小人たちが出てきてくるくる踊り始める。そんな曲で幕が上がったように感じました。

3番目は「ホルベルク組曲 op. 40」E. グリーグ(内田祥子 編曲)【力強い16分音符のリズムによって疾風のような活気にあふれる〈前奏曲〉、三拍子によるロマンチックな緩徐楽章(サラバンド)、軽やかな(中間部)を構成する〈ガボットとミュゼット〉、北欧独特の翳りの奥に情熱を秘めた〈エア〉を経て、2拍子の小気味よい〈リゴードン〉で全曲が結ばれる。(解説より一部転記)】を5つ続けて演奏。

一つ目の〈前奏曲〉はその軽快なリズムを聴いた瞬間、競馬のレースが浮かびました。二つ目の〈サラバンド〉に入ると一転して落ち着いた曲になるので、レースを終えてホットしたところだろうか、三つ目の〈ガボットとミュゼット〉になると次のレースに向けて気分転換でもしている様子。四つ目の〈エア〉はベースが“mf”メロディーが“mp”のフレーズがあってアコーディオンではバランスがとても難しいと御喜美江さんは演奏の前に解説をしていたけれども、御喜美江さんの弾くmfの中でも大田智美さんのmpの音は筆者の席(16列目)でもしっかり届いていました。最後、五つ目の曲〈リゴードン〉は軽快な曲、レースで優勝でもしたのだろうか喜びいっぱいです。そして静かに再び夢の世界へとどっていき感じです。

～休憩～

後半の始まりはちょっと変わっていました。衣装も御喜美江さんは上部が黒、腰のあたりから裾にかけて赤のグラデーションのドレス。大田智美さんはブルーのドレスに変えていただけでなく、舞台の両端に離れて向き合う形で座っての演奏でした。このような舞台の使い方は解説をみて納得。曲は「エコー」A. クシャノフスキー（1951～1990）。曲の終盤で大田智美さんが左手のひらを小刻みにゆらしていたけれど、静寂の中で筆者に実際の音は聞き取れなかった。でもきっと演奏者には聞こえていたんでしょうね。

曲の解説では【1981年、御喜さんのためにアコーディオンとチェンバロのデュオとして書かれ、後に2台のアコーディオン版も完成された。曲は遠く離れて位置する2台が文字通り互いに「エコー」を奏で合う。作曲者はアコーディオン奏者でもあり39歳で早世するまで世界各地の音楽祭などで活躍し、現代アコーディオンの発展に力を尽くした。御喜さんは、「ドイツとポーランドは当時、近くて遠い国でした。その2つの国をつなぐ“エコー（こだま）”として、2つのアコーディオンを結びつけたシンブルできれいな曲」と語っている。（解説より一部を転記）】

「エコー」が終わると二人は舞台中央に戻ってしばし二人のトークタイム。（大田智美さんはドイツ留学の様子を、御喜美江さんは、このような演奏会は本当にしばらくぶり、3年間仕事がなかったのを曲を温めていたこと、また、サッカーのワールドカップドイツ戦はご主人（ドイツ生まれ）と一緒に見ていて、対スペイン戦は、スペインで見ていたことなど語り客席から笑いも漏れちょっと肩がほぐれた感じです。

さて、トークの後は「スラヴ舞曲 op. 72-2／スラヴ舞曲 op. 46-8」A. ドヴォルザークへと進みます。遊園地の回転木馬に乗って楽しんでいると思ったら何を思い出したのだろうか、突然走り出します。そんな感じをうけた曲でした。

そして次の曲は曲名からして“どんな曲だろう”と気になります。「TIERKREIS（黄道十二宮）」より水瓶座／さそり座／しし座／魚座／乙女座（K. シュトックハウゼン）星座をイメージした曲です。【カールハインツ・シュトックハウゼンは20世紀ドイツを代表する現代音楽作曲

家。電子音楽など、革新的な音楽で主導的な役割を果たし、大きな影響を与え続けた。1974年から75年に作曲された本作はもともとオルゴールのための作品で、黄道12星座を、12の「音によるイメージ」として表したもの。実演する際はどのような楽器や声の組み合わせでもよく、記譜されているそれぞれのメロディーやテンポと呼応させた独自の響きを持ち、前衛音楽とは裏腹の親しみやすさが感じられる作品となっている。】

上記はプログラムの曲紹介の抜粋ですが、みなさんはこの紹介を読まれてイメージできるだろうか。1曲ごとに星座の名前を言ってから演奏します。筆者は水瓶座なので最初の曲を目を閉じて聴いていました。風を送っているのはわかって残念ながら何もイメージできませんでした。さそり座は、気泡がぷくぷくと上っていくように感じました。しし座は、宇宙を思わせる響きがあります（ステージはライトで赤く）。魚座は、海には上層、中層、深海、超深海があつていろいろなタイプの魚たちが暮らしているとコメントがあつて、舞台の上境目から天井までを薄水色のライトで照らし、舞台は海の中を感じられるように工夫されていた。最後の乙女座はふつうの照明にもどって立奏でした。会場に向かって幾度かお辞儀をしていたのは客席への感謝の気持ちだったのだろうか。

プログラム最後の曲は、「オブリビオン（忘却）」／エスクアロ（鮫）」A. ピアソラの2曲です。独奏で聴くこともあるけれど、また違った豊かさを感じました。

全体に感じたことは、演奏中にチラッと鍵盤やボタンをのぞき込むことはない。また、操られているように一心不乱に演奏している姿は、まるで指揮者をみているかのようでした。

アンコールはCoba作曲の「Sara」、二人とも立奏です。華やかな演奏で幕を下ろしました。

チケットは、コンサート数日前になる12月18日（日）開かれた関東アコ12月実行委員会に参加された方から「一緒に聴きに行く予定だった友達が行けなくなり1枚無駄になるのでどなたか都合の付く方おられますか」と呼びかけがあったので、筆者が手をあげて購入しました。聴き終えたいまでは譲っていただいた方に感謝しております。（記：乙津）